

Toddler 期の子どものいやいや行動に対する養育者の対処行動 — 子ども観といやいや行動の捉え方に着目して —

大澤 鞠香・藤崎 春代

Parents' coping behavior with toddlers' unpleasant behaviors: Focusing on perceiving children's unpleasant behaviors

Marika OSAWA and Haruyo FUJISAKI

We conducted a questionnaire survey with parents of children of toddlers. We examined the relationship between parents' coping behaviors and toddler's unpleasant behaviors, parents' perception of toddler's unpleasant behaviors, and parents' perception of toddler's in general. We developed the Perspectives on Children Scale to assess coping with unpleasant behaviors by parents and clarify unpleasant behaviors. The result of the correlation analysis indicated that the more a toddler was considered to be a person, the more the toddler was able to respond positively to explanations and persuasions. However, the more a toddler was considered to be a personal belonging of the parents, the higher was the parents' unease and embarrassment with the toddler's behavior, and applying pressure on the toddler. It seemed that toddlers recognized parents who respond adaptively to their disgusting behaviors. Moreover, toddlers recognize not only that they are individuals, but also that they are immature and need adults' protection. Responding with explanations and persuasion might reflect the adult's recognition of the toddler's growth and respect for children's abilities, as well as protecting children by attending to their need for protection by adults.

Key words : unpleasant behavior (いやいや行動), view of children (子ども観), coping behavior (対処行動)

問 題

1. Toddler 期の子どもを育てる親の葛藤

子どもが一個の人間として立ち現れてくるのは、1歳半～3歳（Toddler 期：よちよち歩きの頃）の子どもの反抗や自己主張が盛んな時期であり、一般的に第一次反抗期とも呼ばれる。発達心理学において、いやいや期の子どもの自己主張は自我の芽生えの象徴であり、成長の過程で必要な行動であるとされている。しかし、母親にこの時期の子どもを表すキャッチフレーズを聞いた結果、「ムカつく期」「ジコチュー期」「おしゃべり期」「感情ジェットコースター」「とにかくNO！ちゃん」「ちび怪獣」など、様々な意見が挙がった（主婦の友社, 2016）。このことから、母親がもつ子どものいやいや期の捉え方は多様にあること

が推測されるが、中でも負のイメージを持つキャッチフレーズが多く見られる。このように、いやいや期の子どもに対して負のイメージを抱く養育者は、それまで従順であった子どもの態度が急に変わることによって戸惑いや苛立ちをもち、子育てに対して葛藤を抱くことが考えられる。

坂上（2002）はこの時期の親子の発達を検討するにあたって、親子というシステムの変化の側面こそ明らかにする必要があると述べている。その理由として、子どもの探索欲求の増大や意図的な反抗の開始は、それまで保たれてきた親子システムの均衡状態を崩す方向に働くと考えられ、親子の双方に、互いの反応に対する再調整を迫るからであると述べている。すなわち、親の側には子どもの探索行動に制限を課す必要性や、そうした制限に対する子どもからの反発に適応する必要性

が生じ、子どもの側には、親からの制限や禁止を受けることに適応する必要性が生じることになるのである。そして、親、子の双方が互いの反応や変化に適応していくことによって、歩行開始期の親子間の葛藤は落ち着いていくものだと考えた。このように、歩行開始期に生じる親子間の葛藤のやりとりの変化を、母子の共変化の過程と位置づけた坂上(2002)は、この時期を通じて母、子の各々にいかなる変化が見られるのか、そして、両者の変化の絡み合いの中で母子のやりとりがいかに再組織化されていくのか、その過程を明らかにするための検討を行った。母子の変化を見るにあたって、1組の親子を、子どもが15～27ヶ月の時期に観察し、子どもの行動とそれに対する母親の対応をカテゴリーに従って分類を行ったところ、最初の頃は、単純表現(「だめ」と言うなど)による非難・叱責が多かったのに対し、観察を終える頃は、反語表現(「なんで～するの?」、「どうして～なの?」など)による非難や叱責や、交換条件を出すことや、脅したり、突き放した態度をとるなどの行動が多く見られた。このことから、子どもの発達とともに、母親の対応のレパートリーも増え、相互に発達していることが窺われる。

そこで、本研究においても母子の共発達に着目し、子どものいやいや行動に対する母親の対処行動を明らかにしたいと考える。

2. Toddler期の子どものいやいや行動に対する母親の対処行動

坂上(2003)は、1歳～3歳の母親に対して面接調査を行い、①子どもの反抗や自己主張が激しくなるに伴い、母親はどのような経験をするのか、②反抗や自己主張に対して、母親はいかなる理由でどのような対応をとるのか、③それらの対応は時期を経てどう変化するのか、④この時期の母親の経験に、子どもの出生順位による違いはあるのかについての検討を行った。その結果、子どもの反抗や自己主張に対する母親の対応は3種類に分けられることが明らかとなった。1つ目は母親の期待や意図、計画、感情に強迫的に子どもを従わせる「自己焦点型対応」(怒る、突き放す、強制する、叩く)、2つ目は子どもの興味や関心に留意しつつ、母親の意図や計画に子どもを従わせようと方向づける「自己・子焦点型対応」(説明・

説得、物による注意の転換、取引、脅す、きょうだい・他児の利用、自尊心に訴える)、3つ目は、母親の側が子どもの意図や要求に従う「子焦点型対応」(要求に合わせる、要求の甘受)である。本研究では、このように、いやいや行動に対する対応が複数のタイプに分かれる点に着目する。ただし、坂上(2003)の研究方法は質的なものであるため、その結果を踏まえつつ、Toddler期の子どものいやいや行動に対する対処行動を測る尺度を作る必要があると思われる。そのため、坂上(2003)の結果で得られた対処行動の他に、坂上(2002)の結果から窺われたものや、雑誌などを参考に新たな項目を加えることで尺度の作成を行いたい。

さらに、第1子母親の多くが子どもの反抗や自己主張の本格化を否定的に捉えていたのに対し、第2子以降の母親の約半数はそれを肯定的あるいは中立的に捉えていた。坂上(2003)は、このことについて、第2、3子の育児になると、子どもに対する期待や姿勢、対応を子どもの個性や状態に合わせてある程度自動的に調整しうようになる、あるいはある程度既に調整しているために、適応の努力を要するほどの状態には至らないのかもしれないと考察している。この結果から、第1子のToddler期と第2子の時とではいやいや行動の対処行動に違いがあることが想定されるため、本研究では対象者に第1子の頃を想起して回答してもらうこととする。

3. 子どもの自己主張に対する母親の認知

Toddler期の子どもの行動に対する養育者の対処行動の背景には、親の認知が関係していると考えられる。その認知の仕方には2つの種類があり、1つ目は子どもの存在そのものをどのように捉えているか、2つ目は、Toddler期の子どもの行動をどのように捉えているかということである。本研究ではこの両方に着目する。

1) 子ども観

子どもの存在そのものをどのように捉えているかについて検討するにあたり、本研究では「子ども観」に着目する。嘉数・島袋・當山・喜友名・友利・廣瀬(1997)は、子ども観の定義を「子どもに対する認知の仕方」としているが、本研究においても、子ども観は母親の認知の1つであると

考えるため、これを採用する。子ども観については、永澤（1996）の「母親の子ども観と養育の関係」を参照したい。ここでいう子ども観とは、「母親が子どもをどう捉えているか」を指している。永澤（1996）は、子ども観が養育態度を規定する要因として働いていることを検証するため、乳幼児の母親に対して質問紙調査を行った。その結果、母親の子ども観は、子どもは、あらゆる可能性をもっており、発想が豊かであると考え「一個の人間」、うるさく、面倒くさい存在である「否定的な存在」、愛らしく愛おしい存在である「愛しい存在」、大人に口答えしてはならず、親の言うことを聞かなければならない「親の私物」、未熟であり、大人の保護がなければ生きていけない「不完全な存在」、何も知らず、1人では何もできない「無知な存在」の6つに分かれることが明らかとなった。

また、これらの子ども観と養育態度との関連を検討するため、永澤（1996）では品川・品川（1992）のTK式幼児用親子関係検査を用いて養育態度を測定した。TK式幼児用親子関係検査の具体的な下位尺度は、「不満」「非難」「厳格」「期待」「干渉」「心配」「溺愛」「盲従」「矛盾」「不一致」の10尺度で、それぞれ5項目を選出し、計50項目を使用した。その結果、子ども観尺度の「一個の人間」について、養育態度の「非難」「厳格」「期待」「干渉」「心配」「不一致」との間に有意な負の相関が認められた。そのことから、子どもを一個の人間と捉え、存在を尊重している母親は、子どもを親の思い通りにせず、過度な世話を焼かない傾向があることが窺われた。この結果から、養育者の子ども観と養育態度には関連があることが見受けられ、また、それは子どものいやいや行動に対する対処行動とも関連があることが想定される。そのため、本研究においても、永澤（1996）の6つの子ども観から、子どものいやいや行動における対処行動に関連があると思われる「一個の人間」「親の私物」「不完全な存在」の3つを取り上げ、検討を行う。

2) 子どもの反抗場面に喚起される母親の認知スタイル

Toddler期の子どもの行動をどのように捉えているかについて検討するにあたり、中谷・中谷（2006）の、3、4歳の子どもの反抗場面を想定し、

それらの場面で喚起される母親の認知スタイルに着目した研究を参照したい。中谷・中谷（2006）は、先行研究にて臨床経験を通して虐待する母親の被害的な認知が多く指摘されてきたにも関わらず、虐待行為との関連について実証的に研究された例はほとんど見当たらないことを指摘した。そして、母親のストレスが喚起される場合、特に反抗の現れる幼児期の子どもと接する中で、どのような認知スタイルが子どもに対する攻撃や拒否行動をもたらすのかを実証的に研究することが非常に重要であると訴えている。

中谷・中谷（2006）は①母子の日常的な関わりにおける子どもの反抗場面を想定し、それらの場面で喚起される母親の認知スタイルを概念化すること、②なかでも、「子どもがわざと自分を困らせる」「子どもに馬鹿にされた」などの【被害的認知】という観点を中心に、虐待的行為（ここでは、「頭をたたく」「ひどくつねる」など、一般の母親でも行う可能性のある不適切な養育行動も含めて「虐待的行為」と定義されている）との関連を明らかにすることを目的として、3、4歳の子どもをもつ母親を対象に質問紙調査を行った。その際、母親の認知スタイルを概念化するため、3つの側面からなる尺度の作成を試みた。3つの側面とは、①「子どもの悪意を感じる」「子どもにバカにされた気がする」など、子どもに対する母親の敵意帰属を中心とした被害的な認知スタイル、②「戸惑いを感じる」などネガティブな側面を捉えた否定的な認知スタイル、③「子どもが成長している証拠だと受け止める」などポジティブな側面を捉えた肯定的な認知スタイルである。そして分析の結果、子どもの反抗場面における母親の認知スタイルは、想定通り3つの下位尺度から成ることが明らかとなった。具体的には、自分を否定されているように感じたり、子どもに無視されたように感じる【被害的認知】、戸惑いを感じたり、子どもにどう関わればよいか悩む【否定的認知】、成長の過程で当たり前の行動だと思ったり、子どもが成長している証拠だと受け止める【肯定的認知】である。また、これらの認知スタイルと育児ストレス、自尊感情との関連を検討したところ、【被害的認知】は育児ストレスと正の相関を示し、自尊感情と負の相関を示した。よって、【被害的認知】が高いほど育児ストレスが高く、自尊

感情が低くなることがわかった。【否定的認知】も同様の結果であった。さらに、認知スタイルと虐待的行為との関連については、【被害的認知】との関連性が最も高く、【肯定的認知】と虐待的行為には有意な関連性が見られなかったとのことだった。このことから、養育者の認知スタイルと、子どものいやいや行動に対する対処行動にも関連があることが想定されるため、本研究においてもこの3つの認知スタイルについて検討することとする。

また、子ども観、子どもの問題行動の捉え方、対処行動はどれも養育者側の捉え方や行動に着目しているものである。しかし、子どもと養育者の発達は親子の相互作用であるとの考えから、子ども側の要因についても検討する必要があると思われる。そこで、子ども側の要因としていやいや行動の発生頻度について伺い、子どものいやいや行動の頻度の多少と、養育者の子ども観、いやいや行動の捉え方、対処行動の関連についても検討を行う。

目的と仮説

本研究では、Toddler期のいやいや行動に対する養育者の対処行動、子ども観、いやいや行動の捉え方について着目し、いやいや期以前にもっていた子ども観や、いやいや期が始まったばかりの頃にもっていたいやいや行動の捉え方によって、いやいや行動に対する対処行動が異なるかについて検討することを目的とする。また、子ども観、いやいや行動の捉え方、対処行動はどれも養育者側の捉え方や行動に着目しているものであるが、子どもと養育者の発達は親子の相互作用であるとの考えから、子ども側の要因についても検討する必要があると思われる。そこで、子どものいやいや行動の頻度の多少と、養育者の子ども観、いやいや行動の捉え方、対処行動の関連についても検討を行う。本研究の意義は、いやいや行動に対する養育者の対処行動と認知の関連性を明らかにすることで、妊娠期の母親学級・両親学級などのみでなく、Toddler期の前にも養育者に対する心理教育を行う必要があることを見出すことにあると考える。

まず、子ども観については、永澤 (1996) の子

ども観尺度の一部を用いる。永澤 (1996) は母親の子ども観と養育態度に関連があることを見出しているが、Toddler期の子どものいやいや行動に対する母親の対処行動についても、子ども観との関連があるのではないかと考える。そのため、本研究では、永澤 (1996) の子ども尺度の中から、子どものいやいや行動に対する対処行動とも関連があると想定される、〈一個の人間〉〈親の私物〉〈不完全な存在〉の3因子を用いることとする。次に、いやいや行動の捉え方については、中谷・中谷 (2006) の子どもの反抗場面における母親の認知スタイルと同様に、【肯定的認知】【被害的認知】【否定的認知】の3種類の認知スタイルがあることが想定されるため、本研究においても中谷・中谷 (2015) が作成した子どもの行動に対する母親の認知尺度を使用する。最後に、いやいや行動に対する対処行動については、坂上 (2003) が子どもの反抗や自己主張に対する母親の対応が《自己・子焦点型対応》《自己焦点型対応》《子焦点型対応》の3種類に分けられることを明らかにしているため、本研究においてもこれをもとに尺度を作成する。

坂上 (2003) は、第2、3子の育児になると、母親は子どもに対する期待や姿勢、対応を、子どもの個性に合わせてある程度自動的に調整しようようになることを明らかにしているため、本研究においては、調査を行う際に、第1子のToddler期の頃について回答していただくこととする。先行研究では母親のみを対象としたものが多いが、近年では父親の育児参加率が上がり、主たる養育者が父親である家庭も増加していると考えられるため、調査対象者を母親のみとせず、「日常の中で子どもと関わる時間が1番長い方」に回答していただくこととする。

仮説は以下の通りである。

【仮説1】子どもを一個の人間として捉えているほど、養育者はいやいや行動を肯定的に捉え、いやいや行動が出た際には、自身と子どもの両方に焦点を当てた行動を取るだろう。

【仮説2】子どもを親の私物と捉えているほど、養育者はいやいや行動を被害的に捉え、いやいや行動が出た際には、自身に焦点を当てた行動を取るだろう。

【仮説3】子どもを不完全な存在として捉えて

いるほど、養育者はいやいや行動を否定的に捉え、いやいや行動が出た際には、子どもに焦点を当てた行動を取るだろう。

方 法

調査対象：神奈川県内私立幼稚園2園に通う子どもの養育者171名、埼玉県内私立幼稚園1園に通う子どもの養育者171名、埼玉県内私立保育園に通う子どもの養育者64名に調査依頼を行い、185名(45.6%)の協力を得た。

調査方法・調査時期：幼稚園、保育園に調査を依頼し許可を得た後に、園を通して無記名自記式質問用紙を配布し、自宅で記入後、調査実施者宛てに郵送をしていただく形で回収を行った。調査は、2017年5月～7月に実施した。

調査内容：質問紙「子どものいやいや行動への保護者の対応に関する調査」として質問紙調査を行った。調査は以下の項目から構成されている。

①フェイスシート：養育者と子どもの続柄、養育者の年齢、子どもの年齢、子どものきょうだいの有無、いやいや行動の程度(1.全くなかった、2.時々あった、3.頻繁にあった、4.毎日のようにあった)、いやいや期の開始と終了時期(いやいや行動があった方のみ)について質問した。

②子ども観尺度：永澤(1996)の子ども観尺度の〈一個の人間〉〈親の私物〉〈不完全な存在〉の3因子。項目数は24で、「1.あてはまらない～4.あてはまる」の4件法である。子どものいやいや行動が始まる前を想定してもらうため、「お子様のいやいや期が始まる前(いやいや期がなかった方は、お子様が1歳半の頃)にもっていた、子どものイメージはどのようなものでしたか。」と教示を行った。

③子どものいやいや行動に対する認知尺度：中谷・中谷(2006)の子どもの行動に対する母親の認知尺度に着目し、調査協力者の負担を考え、全体的な項目数を減らすため、【被害的認知】【否定的認知】【肯定的認知】の中からそれぞれ因子負荷量の低い項目を削除して使用した。項目数は19で、「1.あてはまらない～4.あてはまる」の4件法である。いやいや行動が始まったばかりの頃を想定してもらうため、「お子様のいやいや期が始まったばかりの頃にもっていた、いやいや行動

に関する捉え方はどのようなものでしたか」という教示を行った。いやいや行動がなかった方については、もし子どもがいやいや行動をしたら、どのように考えるか想像して回答してもらった。

④対処行動尺度：(1)坂上(2003)のカテゴリー項目を元に作成した。他には、坂上(2002)や主婦の友社(2016)を参考にした。想定した因子構造は、坂上(2003)で子どもの反抗や自己主張に対する母親の対応としてカテゴリー分けされた《自己・子焦点型対応》《自己焦点型対応》《子焦点型対応》の3因子である。項目数は26で、「1.あてはまらない～4.あてはまる」の4件法である。「お子様のいやいや行動に対してあなた様がとった行動についてうかがいます」と教示を行った。(2)対処行動について効果があったと思うか、「1.全く効果がなかった～4.効果があった」の4件法で尋ねた。

⑤相談相手について：子どものいやいや行動について相談した相手をたずねたが、今回は分析対象としない。

倫理的配慮：本研究の実施に関しては、昭和女子大学の倫理委員会で承認を得た(承認番号16-5)。調査にあたっては、まず各園長に個人が特定されない方法を用いることや、調査用紙は論文執筆後シュレッダーにて速やかに処分すること等、倫理的配慮について口頭で説明を行い、各調査協力者に対しては、質問紙の表紙に倫理的配慮を記載し、回答をもって同意とみなした。また、結果に関しては後日書面にて報告を行うことを質問紙の表紙に示した。

結果と考察

1. 回答者の属性

養育者の平均年齢は36.8歳($SD = 4.71$)であり(内訳：20代7名(4.4%)、30代100名(63.4%)、40代51名(32.4%))、そのうち母親が155名(96.3%)、父親が6名(3.7%)であった。また、子どもの数は2名(52.2%)が最も多く、次いで1名(24.2%)、3名(18.6%)、4名(3.7%)、5名(0.6%)、6名(0.6%)の順に多い結果となった。

第1子の平均年齢は82.3ヵ月($SD = 40.59$)であり、最少が36ヵ月、最大が253ヵ月であった。いやいや行動の開始年齢の平均は21.2ヵ月(SD

=10.08)であり、終了年齢の平均は34.0ヵ月 ($SD = 15.54$)であった。また、いやいや行動の頻度は「全くなかった」が11名 (6.8%)、「時々あった」が80名 (49.7%)、「頻繁にあった」が42名 (26.1%)、「毎日のようにあった」が27名 (16.8%)であった。この結果から、いやいや行動が「全くなかった」と思っている方が6.8%と少ないながらも存在することがわかった。一方で、「毎日のようにあった」と回答された方は16.8%もあり、多くの養育者がいやいや行動を実感していることが明らかとなった。

2. 子ども観尺度の作成

平均値と標準偏差により「子どもは、子どもなりの世界をもっている」、「子どもは、それぞれの個性をもっている」など13項目で天井効果が、「子どもは無能である」「子どもは親の思い通りに動くものだ」など4項目で床効果が見られた。そのうち「子どもは、発想が豊かである」、「子どもは、子どもなりの世界をもっている」、「子どもは常に前へと進んでいく力がある」、「子どもは創造していく力がある」の4項目の最小値が2であり、「子どもは、親の思い通りに動くものだ」の最大値が3であったため、回答に大きな偏りがあると考え、この5項目を削除して分析を行った。他の天井効果や床効果がある項目については、仮説を検討する上で重要な項目と判断したため、削除せずに利用することとした。

19項目に対して、最尤法・プロマックス回転

による因子分析を行った。固有値の変化は、3.35, 2.64, 1.51, 1.33…であり、スクリープロットからも2因子か3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、想定していた3因子を固定して再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量 (.35以上)を示さなかった8項目を分析から除外し、因子分析を最尤法・プロマックス回転で行った。プロマックス回転後の最終的な因子行列を表1に示す。

第1因子は4項目で構成されており、「子どもは、それぞれの個性をもっている」や「子どもは、素晴らしい力をもっている」など、永澤 (1996) の〈一個の人間〉因子と同じ項目が高い負荷量を示していた。そこで、先行研究にならい、〈一個の人間〉因子とした。第2因子は5項目で構成されており、「子どもは、親に口答えしてはならない」や「子どもは、親のいうことを聞かなければならない」など、永澤 (1996) の〈親の私物〉因子と同じ項目が高い負荷量を示していた。そこで、先行研究にならい、〈親の私物〉因子とした。第3因子は2項目で構成されており、「子どもは、不完全である」と「子どもは、未熟である」と、永澤 (1996) の〈不完全な存在〉と同じ項目が高い負荷量を示していた。そこで、先行研究にならい、〈不完全な存在〉因子とした。また、内的整合性を検討するために α 係数を算出した。その結果、〈一個の人間〉は.73、〈親の私物〉は.64、〈不完全な存在〉は.68と十分な値が得られた。

さらに、子ども観尺度の3つの下位尺度に相当

表1 子ども観尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転の因子行列)

項目名	一個の人間	親の私物	不完全な存在	想定していた因子
子どもは、それぞれの個性をもっている	0.82	-0.02	-0.01	一個の人間
子どもは、素晴らしい力をもっている	0.78	0.01	0.05	一個の人間
子どもは、人間として尊重されなければならない	0.66	0.05	-0.05	一個の人間
子どもは、親とは別の一個の人間である	0.40	-0.07	-0.02	一個の人間
子どもは、親に口答えしてはならない	-0.09	0.71	-0.02	親の私物
子どもは、親のいうことを聞かなければならない	0.14	0.59	0.08	親の私物
子どもは、きびしく教育しなければならない	-0.04	0.53	0.11	親の私物
子どもは、親の思い通りに育てるべきである	0.06	0.42	-0.21	親の私物
子どもは、無能である	-0.09	0.35	0.04	親の私物
子どもは、不完全である	0.02	-0.04	1.00	不完全な存在
子どもは、未熟である	-0.04	0.09	0.53	不完全な存在

する項目の平均値を算出し、〈一個の人間〉因子得点（平均値 3.73, *SD* .42）、〈親の私物〉因子得点（平均値 1.81, *SD* .46）、〈不完全な存在〉因子得点（平均値 3.36, *SD* .69）とした。〈一個の人間〉因子得点は 4 の「あてはまる」に、〈親の私物〉因子得点は 3 の「まあまああてはまる」に、〈不完全な存在〉因子得点は 2 の「あまりあてはまらない」に近い得点となった。子ども観尺度の〈一個の人間〉、〈親の私物〉、〈不完全な存在〉との相関係数を算出したところ、〈一個の人間〉は〈不完全な存在〉($r = .17, p < .05$) との間にのみ正の相関がみられた。このことから、子どもを一個の人間として捉えているほど、不完全な存在としても認知していることが窺われた。この点は今後の分析を検討する上で考慮する必要があると思われる。

3. いやいや行動の捉え方尺度の作成

平均値と標準偏差により、天井効果・床効果がみられる項目があるが、仮説を検討する上で全て

重要な項目と判断したため、項目は削除せず利用することにした。19項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は 6.65, 2.49, 1.73, 1.19, 0.91…というものであり、スクリープロットからも 3 因子か 4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、想定していた 3 因子を固定して再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、全ての項目の因子負荷量が十分な値 (.35 以上) を示していたため、項目を削除することなく、3 因子が見出された。最終的な因子行列を表 2 に示す。

第 1 因子は 9 項目で構成されており、「自分の育児が下手なのを子どもに責められているように感じた」や「子どもにバカにされたように感じた」など、中谷・中谷 (2015) の【被害的認知】因子とほぼ同じ項目が高い負荷量を示していた。そこで、先行研究にならい、【被害的認知】因子とした。第 2 因子は 5 項目で構成されており、「子どもにとって必要な行動だと思った」や「子ども

表 2 いやいや行動の捉え方尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転の因子行列）

項目名	被害的認知	肯定的認知	不安・戸惑い	想定していた因子
自分の育児が下手なのを子どもに責められているように感じた	0.82	0.09	-0.01	被害的認知
子どもにバカにされたように感じた	0.77	-0.10	-0.12	被害的認知
自分のことを「ダメな親だ」と評価されているように感じた	0.71	0.02	0.01	被害的認知
子どもに無視されたように感じた	0.71	0.15	0.04	被害的認知
子どもに裏切られたように感じた	0.65	-0.12	-0.11	被害的認知
子どもの悪意を感じた	0.60	-0.02	0.01	被害的認知
自分を否定されているように感じた	0.59	-0.03	0.01	被害的認知
自分の育て方に問題があったのではないかと思った	0.59	-0.03	0.16	否定的認知
子どもが自分に心を閉ざしているように感じた	0.40	0.01	0.15	被害的認知
子どもにとって必要な行動だと思った	0.11	0.89	-0.02	肯定的認知
子どもの成長にとって避けられない行動だと思った	-0.10	0.79	0.16	肯定的認知
成長の過程で当たり前の行動だと思った	0.03	0.71	-0.10	肯定的認知
子どもが成長している証拠だと受け止めた	-0.01	0.71	-0.04	肯定的認知
子どもらしいと思った	-0.04	0.67	0.05	肯定的認知
子どもにどう関わればよいか悩んだ	-0.12	-0.03	0.82	否定的認知
どうしてよいかわからず困ってしまった	-0.03	-0.08	0.81	否定的認知
子どもの胸の内が分からず、不安に感じた	0.10	0.18	0.63	否定的認知
戸惑いを感じた	0.01	0.04	0.50	否定的認知
つらく感じた	0.29	-0.16	0.49	否定的認知

の成長にとって避けられない行動だと思った」など中谷・中谷 (2015) の【肯定的認知】因子と同じ項目が高い負荷量を示していた。そこで、先行研究にならない、【肯定的認知】因子とした。第3因子は5項目で構成されており、「子どもにどう関わればよいか悩んだ」や「どうしてよいかわからず困ってしまった」など中谷・中谷 (2015) の【否定的認知】因子とほぼ同じ項目が高い負荷量を示していた。しかし、【否定的認知】に入っていた「自分の育て方に問題があったのではないか」が【被害的認知】に入ったことで、第3因子はより養育者の不安や戸惑いを表す項目が残ったと考えられる。そこで、第3因子を新たに【不安・戸惑い】因子と命名した。内的整合性を検討するために α 係数を算出した結果、【被害的認知】は.87、【肯定的認知】は.86、【不安・戸惑い】は.81と十分な値が得られた。3つの下位尺度の平均値は、【被害的認知】因子得点 (平均値1.72, SD .60)、【肯定的認知】因子得点 (平均値3.22, SD .75)、【不安・戸惑い】因子得点 (平均値2.79, SD .75) となった。

4. いやいや行動に対する対処行動尺度

1) いやいや行動に対する対処行動尺度の作成

平均値と標準偏差により、天井効果・床効果がみられる項目があるが、26項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は、4.59, 2.88, 1.90, 1.51…というものであり、スクリープロットからも2因子か3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、2因子と3因子それぞれ固定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量 (.35以上) を示さなかった7項目を分析から除外し、因子分析を最尤法・プロマックス回転で行った。そして、回転後の因子行列の項目を見ると、第3因子の項目数が極端に少なくなってしまったため、2因子構造を選択することにした。プロマックス回転後の最終的な因子行列を表3に示す。なお、第1因子の「子どもの行動に対して笑ったり、言葉でからかう」、「『悪い子』『頑固者』など、子どもの性格の悪さを伝える」と、第2因子の「泣きまねをするなど、母親の悲しい気持ち表現する」の因子負荷量は、.35を下回っているが、それぞれもう一方の負荷量が低く、因

子を構成するにあたって重要な項目であると考えため、その点を考慮しつつ残すこととした。

第1因子は12項目で構成されており、『『ごめんなさいでしょ』など、謝罪を要求する』や「親の予定や都合に強制的に従わせる」など、養育者の高圧的な態度を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、《高圧的態度》因子と命名した。第2因子は7項目で構成されており、「よい子でいられたときに、たくさんほめる」や『『～だから…してもらってもいい?』など、理由をつけてお願いする』など、養育者が子どもに説明や説得をする行動を示す項目が高い負荷量を示していた。そこで、《説明・説得》因子と命名した。内的整合性を検討するために、 α 係数を算出した。その結果、《高圧的態度》は.83、《説明・説得》は.64と十分な値が得られた。さらに、いやいや行動に対する対処行動尺度の2つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、《高圧的態度》因子得点 (平均値2.23, SD .50)、《説明・説得》因子得点 (平均値3.05, SD .40) とした。

5. 子ども観といやいや行動の捉え方といやいや行動に対する対処行動の関連

子ども観尺度の3因子と、いやいや行動の捉え方尺度の3因子と、いやいや行動に対する対処行動尺度の2因子との相関係数を算出したところ、表4に示す結果が得られた。

子ども観尺度の〈一個の人間〉はいやいや行動の捉え方尺度の【肯定的認知】($r = .36, p < .01$)との間に正の相関がみられた。このことから、子どもを一個の人間であると思っているほど、いやいや行動を肯定的に捉えていることがわかった。また、〈親の私物〉は【被害的認知】($r = .30, p < .01$)、【不安・戸惑い】($r = .23, p < .01$)との間に正の相関が、【肯定的認知】($r = -.27, p < .01$)との間に負の相関がみられた。よって、子どもを親の私物であると考えているほど、いやいや行動に対して不安や戸惑いを抱き、肯定的に捉えず、被害的に認知することがわかった。さらに、〈不完全な存在〉は【肯定的認知】($r = .20, p < .05$)との間に正の相関がみられた。この結果から、子どもを不完全な存在と思っているほど、いやいや行動を肯定的に捉えていることがわかった。

子ども観尺度の〈一個の人間〉はいやいや行動

表3 いやいや行動に対する対処行動尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転の因子行列）

項目名	高圧的態度	説明・説得	想定していた因子
「ごめんなさいでしょ」など、謝罪を要求する	0.71	0.07	自己焦点型対応
親の予定や都合に強制的に従わせる	0.65	-0.02	自己焦点型対応
「そんな子は知らない」などと言ったり、無視をするなど突き放した態度をとる	0.62	-0.09	自己焦点型対応
「自分でやったんでしょ」「わざとやる」など、子ども自身に責任があることを伝える	0.61	-0.02	自己焦点型対応
「なんで～するの?」「どうして～なの?」など、反語表現で叱る	0.58	-0.06	自己焦点型対応
「おかしくない」「あはじゃない」など、子どもの快表現を否定する	0.57	0.00	自己焦点型対応
叩くなど、身体的な罰を与える	0.57	-0.18	自己焦点型対応
「～したら、…してあげる」など、交換条件を提示する	0.53	0.19	自己・子焦点型対応
「だめ」「～してはいけない」など、直接的な表現で叱る	0.51	-0.09	自己焦点型対応
子どもの前から立ち去るなど、子どもと物理的な距離をとる	0.41	0.20	自己・子焦点型対応
子どもの行動に対して笑ったり、言葉でからかう	0.34	0.06	自己・子焦点型対応
「悪い子」「頑固者」など、子どもの性格の悪さを伝える	0.33	0.04	自己焦点型対応
よい子でいられたときに、たくさんほめる	-0.04	0.62	自己・子焦点型対応
「～だから、…してもらってもいい?」など、理由をつけてお願いする	0.02	0.56	自己・子焦点型対応
子どもの得意なことをほめるなど、おだてることで親の指示に従わせる	0.15	0.52	自己・子焦点型対応
子どもの訴えに、じっくりと耳を傾ける	-0.21	0.40	自己・子焦点型対応
「～さん痛いよ」「かわいそう」などと言って、他者の悲しい気持ちを伝える	-0.08	0.40	自己・子焦点型対応
「～だからしてはいけない」など、やってはいけない行動の理由を説明する	-0.01	0.37	自己・子焦点型対応
泣きまねをするなど、母親の悲しい気持ちを表現する	0.16	0.34	自己焦点型対応

表4 子ども観と、いやいや行動の捉え方と、いやいや行動に対する対処行動の相関係数

	いやいや行動の捉え方			いやいや行動に対する対処行動	
	被害的認知	肯定的認知	不安・戸惑い	高圧的態度	説明と説得
子ども観					
一個の人間	-.16	.36**	-.06	-.13	.19*
親の私物	.30**	-.27**	.23**	.39**	-.18*
不完全な存在	.02	.20*	-.00	.11	.09
いやいや行動に対する対処行動					
高圧的態度	.47**	-.23**	.36**	—	—
説明と説得	-.01	.36**	.00	—	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

の捉え方尺度の《説明・説得》($r = .19, p < .05$)との間に正の相関がみられた。このことから、子どもを一個の人間と考えているほど、いやいや行

動を取る子どもに対して説明や説得をして対応することがわかった。加えて、《親の私物》と《高圧的態度》($r = .39, p < .01$)との間に正の相関が、

《説明・説得》($r = -.18, p < .05$)との間に負の相関がみられた。この結果から、子どもを親の私物であると考えているほど、子どものいやいや行動に対して、説明や説得をせず、高圧的な態度をとることがわかった。

いやいや行動の捉え方尺度の【被害的認知】はいやいや行動に対する対処行動尺度の《高圧的態度》($r = .47, p < .01$)との間に正の相関がみられた。このことから、いやいや行動を被害的に捉えているほど、その対処行動として高圧的な態度をとることがわかった。また、【肯定的認知】は《説明・説得》($r = .36, p < .01$)との間に正の相関が、《高圧的態度》($r = -.23, p < .01$)との間に負の相関がみられた。よって、いやいや行動を肯定的に捉えているほど、その対処行動として高圧的な態度はとらず、説明・説得をすることが明らかとなった。加えて、【不安・戸惑い】と《高圧的態度》($r = .36, p < .01$)との間に正の相関がみられた。この結果から、いやいや行動に対して不安

や戸惑いを感じているほど、その対処行動として、高圧的な態度をとることがわかった。

6. 子ども観各因子のクラスタ化と、いやいや行動の捉え方と対処行動の平均値の差の検定

子ども観3因子の〈一個の人間〉と〈不完全な存在〉との間に相関がみられたため、その得点をもとに階層的クラスタ分析を行ったところ、2つのクラスタが得られた。2つのクラスタの子ども観3因子の平均値と標準偏差を比較したものを、表5と図1に示す。そして、2つのクラスタの子ども観3因子の得点の差を比較するために、 t 検定を行った。その結果、すべてにおいて2つのクラスタの効果が0.1%水準で有意であった。クラスタ1の〈一個の人間〉($t = 5.73, p < .001$)と〈不完全な存在〉($t = 14.53, p < .001$)は、クラスタ2よりも有意に高く、〈親の私物〉($t = -4.16, p < .001$)は有意に低かった。よって、クラスタ1の子ども観の各因子得点の特徴は、〈一個の人間〉

表5 2つのクラスタの子ども観3因子の平均値 (SD) の比較

	クラスタ1	クラスタ2	t 値
一個の人間	3.92 (0.17)	3.62 (0.47)	5.73***
親の私物	1.63 (0.36)	1.91 (0.48)	-4.16***
不完全な存在	3.97 (0.12)	3.02 (0.64)	14.53***

*** $p < .001$

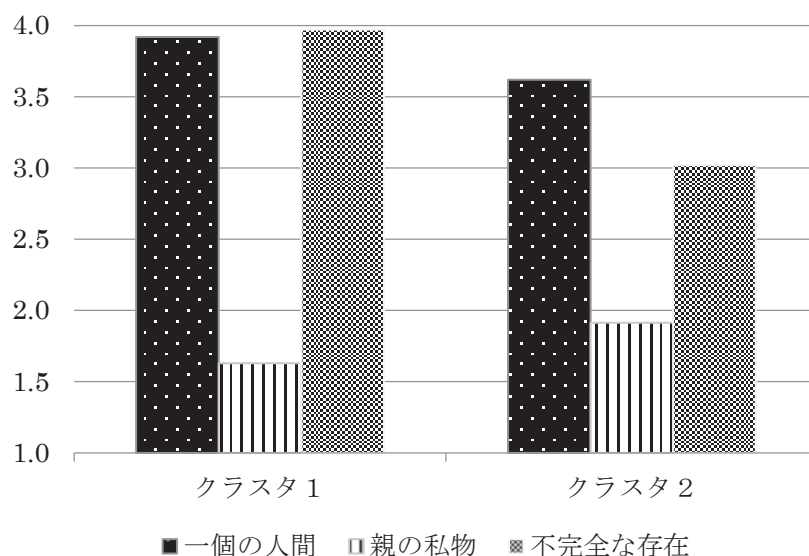


図1 2つのクラスタの子ども観3因子の平均値

と〈不完全な存在〉因子得点が高いことであり、「親の保護が必要な1人の人間」と命名した。また、クラスタ2の特徴は、〈親の私物〉因子得点が高いことであるため、「親の私物」と命名した。2つのクラスタ間で比較すると、そのような特徴がみられたが、クラスタ内で比較してみると、「親の保護が必要な1人の人間」と同様に「親の私物」も、〈親の私物〉に比べて〈一個の人間〉と〈不完全な存在〉が高いことがわかった。

1) 2つのクラスタのいやいや行動の捉え方尺度と、いやいや行動に対する対処行動尺度の平均値の差の検討

2つのクラスタのいやいや行動の捉え方尺度3因子の平均値と標準偏差を比較したものを、表6に示す。階層的クラスタ分析で得られた2つのクラスタのいやいや行動の捉え方尺度の因子得点の平均値を比較するため、 t 検定を行った。その結果、【肯定的認知】因子得点の平均に1%水準で有意な差が見られた($t(96.62) = 3.13, p < .01$)。このことから、子どもを親の保護が必要な1人の人間と捉えている養育者は、いやいや行動を肯定的に捉えることがわかった。

また、階層的クラスタ分析で得られた2つのクラスタのいやいや行動に対する対処行動尺度の因子得点の平均値を比較するため、 t 検定を行った。その結果、《説明・説得》因子得点の平均に10%水準で有意な差が見られた($t(93.97) = 1.67, p < .10$)。このことから、子どもを一個の人間や、不完全な存在と捉えている養育者は、いやいや行動に対して、説明や説得をして対処する傾向

があることがわかった。

全体的考察

本研究では、Toddler期のいやいや行動に対する養育者の対処行動、子ども観、いやいや行動の捉え方について着目し、いやいや期以前にもっていた子ども観や、いやいや期が始まったばかりの頃にもっていたいやいや行動の捉え方によって、いやいや行動に対する対処行動が異なるかについて検討した。また、子ども観尺度、いやいや行動の捉え方尺度、いやいや行動に対する対処行動尺度の作成を試みた。

1. 尺度の作成

子ども観尺度は、子どもを1人の人間として認識している〈一個の人間〉因子、親の私物のように捉えている〈親の私物〉因子、子どもを不完全な存在として認知している〈不完全な存在〉因子の3因子から構成されることが分かった。永澤(1996)の子ども観尺度と比較すると、下位尺度内の項目数は変わっているものの、内容に大きな相違は見られなかった。このことから、養育者の子ども観の構造は1993年から大きく変わっていないことが窺われる。

いやいや行動の捉え方尺度は、子どもの行動を被害的に捉える【被害的認知】因子、肯定的に捉える【肯定的認知】因子、子どもの行動に対して不安や戸惑いを抱く【不安・戸惑い】因子の3因子から構成されることが分かった。中谷・中谷

表6 2つのクラスタのいやいや行動の捉え方3因子の平均値(SD)の比較

	クラスタ1	クラスタ2	t 値
被害的認知	1.61 (0.61)	1.78 (0.59)	-1.68
肯定的認知	3.43 (0.64)	3.10 (0.59)	3.13**
不安・戸惑い	2.67 (0.79)	2.88 (0.73)	-1.62

** $p < .01$

表7 2つのクラスタのいやいや行動に対する対処行動2因子の平均値(SD)の比較

	クラスタ1	クラスタ2	t 値
高圧的態度	2.19 (0.47)	2.27 (0.51)	-0.89
説明・説得	3.12 (0.43)	3.01 (0.38)	1.66*

* $p < .10$

(2006) の子どもの行動に対する母親の認知尺度と比較すると、【否定的認知】に属していた「自分の育て方に問題があったのではないかと思う」という自分を否定するような内容の項目が【被害的認知】に加わっていた。そのため、【否定的認知】の項目は、子どもの行動を否定的に捉えているというよりも、養育者の不安や戸惑いを表した内容であると考え、因子名を【不安・戸惑い】因子と命名した。中谷・中谷 (2006) は子どもの問題行動に対する養育者の捉え方の検討を行っており、子どもの問題行動に対する捉え方と、いやいや行動に対する捉え方はほとんど同じであることが分かった。1つ異なる点としては、子どものいやいや行動の捉え方の特徴として、不安や戸惑いを抱くことが明らかとなった。

いやいや行動に対する対処行動尺度は、子どもに対して高圧的な態度をとる《高圧的態度》、説明や説得をする《説明・説得》の2因子から構成されることが分かった。坂上 (2003) のカテゴリーは《自己焦点型対応》、《子焦点型対応》、《自己・子焦点型対応》の3つであったが、本研究では、《自己焦点型対応》の項目を多く含む因子と、《自己・子焦点型対応》の項目を多く含む因子の2つに分けられた。このことから、いやいや行動に対する対処行動は、養育者と子どものどちらかに焦点を当てた行動というよりも、子どもの主体性を認める行動か否かに分けられることがわかった。

2. 仮説の検証

子どもを一個の人間と思っているほど、いやいや行動を肯定的に捉え、説明や説得をして対応することがわかった。《説明・説得》には、仮説で想定していた《自己・子焦点型対応》の多くの項目が当てはまることから、仮説1の「子どもを一個の人間として捉えているほど、養育者はいやいや行動を肯定的に捉え、いやいや行動が出た際には、自身と子どもの両方に焦点を当てた行動を取るだろう。」は支持された。

また、子どもを親の私物と考えているほど、いやいや行動に対して不安や戸惑いを抱き、高圧的な態度をとることがわかった。《高圧的態度》には、仮説で想定していた《自己焦点型対応》の多

くの項目が当てはまることから、仮説2の「子どもを親の私物と捉えているほど、養育者はいやいや行動を被害的に捉え、いやいや行動が出た際には、自身に焦点を当てた行動を取るだろう。」は一部支持された。

一方で、子どもを不完全な存在と思っているほど、いやいや行動を肯定的に捉えていることが分かったが、対処行動との関連は見られなかった。このことから、想定していた仮説3「子どもを不完全な存在として捉えているほど、養育者はいやいや行動を否定的に捉え、いやいや行動が出た際には、子どもに焦点を当てた行動を取るだろう。」は棄却された。〈不完全な存在〉と対処行動については関連が見られなかったことの要因の1つとして、対処行動尺度の項目には、否定的に捉えた方の対応は含まれていなかった可能性が考えられる。今後の研究では、実際に行われている対処行動についてさらに調べる必要があるだろう。また、〈不完全な存在〉と【肯定的認知】に正の相関が認められたことについては、〈一個の人間〉と〈不完全な存在〉に正の相関があったことが要因の1つであると思われる。そのため、子ども観尺度の下位尺度得点をもとにクラスタ分析を行った。その結果、2つのクラスタが得られた。1つ目は〈一個の人間〉と〈不完全な存在〉の因子得点が高かったため、「親の保護が必要な1人の人間」と命名した。2つ目は〈親の私物〉の因子得点が高かったため、「親の私物」と命名した。この2つのクラスタに、いやいや行動の捉え方尺度、いやいや行動に対する対処行動尺度の下位尺度得点の差があるかを検討した結果、「親の保護が必要な1人の人間」の方が【肯定的認知】と《説明・説得》の因子得点が高いことが分かった。一方で、「親の私物」の方が有意に高いものはなかった。この結果から、子どものいやいや行動に対して適応的に対応する養育者は、子どもを1人の人間として認めているだけでなく、未熟であるがゆえに大人の保護が必要な存在でもあることを同時に認識していることが窺われた。説明・説得をして対応するということは、子どもの成長を認め、自力でできる点を尊重しつつ、大人の保護が必要な点に関しては注意をすることで守るということなのかもしれない。

3. 子育て支援への示唆

子ども観尺度をクラスタ分析した結果、「親の保護が必要な1人の人間」と「親の私物」の2つに分かれることがわかったが、どちらもクラスタ内で比較すると、〈親の私物〉に比べて〈一個の人間〉と〈不完全な存在〉の値が高かった。このことを踏まえると、有意差はあるものの、2つのクラスタの因子得点の差はわずかであり、「親の私物」に当てはまる方々の行動が、「親の保護が必要な1人の人間」の方々の対応に比べて逸脱したものであるとは考えにくいことが推察される。そのため、子どもを親の私物と考えているかどうかは外から見て判断しにくい。しかし、高圧的な態度であるかどうかは1つの判断目安になり得るのではないだろうか。子どものいやいや行動が頻繁にあり、不安や戸惑いを抱えている養育者を助けることができるよう、専門家は養育者の子どもに対する行動をよく観察し、支援に繋げることが求められるだろう。

4. 今後の課題

今回の調査では、第一子がToddler期の頃のことを想起してもらう形での回答であった。そのため、子ども観やいやいや行動の捉え方が、回答されたものと当時のものとは異なっている可能性は否定できない。また、子ども観と捉え方と対処行動について、想起してもらう時期を教示で変えたものの、Toddler期と大きな枠で捉えると同じ時期であり、正確に想起することは難しかったのではないと思われる。そのため、今回の研究で

はそれぞれの因果関係を示すことは困難であった。今後、子どものToddler期における母親の変化について着目する際には、それぞれの時期に当てはまる対象者間で比較することが望ましいだろう。

引用文献

- 嘉数朝子・島袋垣男・當山りえ・喜友名静子・友利久子・廣瀬真喜子 (1997). 大学生の「子ども観」に関する研究——保育職志望度との関連で—— 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部 (51), 207-213.
- 永澤道代 (1996). 母親の子ども観と養育態度の関係 追手門学院大学心理学論集, 4, 11-21.
- 中谷奈美子・中谷素之 (2006). 母親の被害的認知が虐待行為に及ぼす影響 発達心理学研究, 17, 2, 148-158.
- 坂上裕子 (2002). 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的变化——母子における共変化過程の検討—— 発達心理学研究, 13, (3), 261-273.
- 坂上裕子 (2003). 歩行開始期における母子の共発達——子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討—— 発達心理学研究, 14, (3), 257-271.
- 品川不二郎・品川孝子 (1992). TK式幼児用親子関係検査 田研出版主婦の友社 (2016). イヤイヤ期Baby-mo 主婦の友社

おおさわ まりか (発達支援研究所スプラウト)
ふじさき はるよ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)